

Harmonious Co-existence with the Plants:
Life-long learning and Scientific Societies and/or
Botanical Gardens (Invited articles for
commemorating the Sixtieth Anniversary of the
Society for the Study of Phytogeography and
Taxonomy)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00053474

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



60周年記念講演要旨

岩槻邦男：植物とつきあう——生涯学習と学会・植物園

〒 669-1546 兵庫県三田市弥生が丘 6 丁目 兵庫県立人と自然の博物館

Kunio Iwatsuki: Harmonious Co-existence with the Plants —Life-long learning and Scientific Societies and/or Botanical Gardens

Museum of Nature and Human Activities, Hyogo, Yayoi-ga-oka 6 cho-me, Sanda City, Hyogo Prefecture 669-1546, Japan

Abstract

The sixtieth anniversary of the Society for the Study of Phytogeography and Taxonomy should be congratulated, especially in our oriental idea on the sixty years' cycle of calendar. Japanese Archipelago was developed by our ancestors under a design to fit a harmonious co-existence between nature and mankind. They loved the plants there and stood on respective awe of them. Such kind of concept should be reminded and promoted in maintaining the only earth which should be sustained by the human beings. Non-professional naturalists in Japan have had scientific curiosity on plants keeping an ideal collaboration with professional plant scientists there, and contributed in promotion of botanical research. This collaboration successfully promoted conservation of biodiversity on this Archipelago.

Key words : development, harmonious co-existence, life-long learning, nature, sustainable use of biodiversity

はじめに

植物地理・分類学会がめでたく創立60年、いいかえれば還暦を迎えるということでまずお祝いを申し上げます。たまたま、現在わたしがお手伝いをしております兵庫県立人と自然の博物館は今秋開館20年目で成人式を迎え、わたしも通勤10年目になると、いろいろ節目の年にあたっております。そこで、わたしたち植物を研究の対象としております者が、植物とどう接するか、いっばんの人々の植物との関わりとどのように関与するのか、日頃考えておりますことを話させていただきます。

植物分類学の分野は、日本では特に、日本人に普遍的な自然好きの傾向を生かし、専従の研究者と、いわゆる non-professional naturalists の協働が理想的に展開していたために、日本列島のように植物多様性の豊かな国土でも、詳細な調査研究が進んでいました。20世紀末頃からの、いわゆる地球環境問題に対応するシンクタンク機能の発揮にしても、レッドリストの作成など、世界に冠たる成果をあげ

てきましたが、これは専従の研究者だけではとても背負いきれない作業でした。そして、このような協働の推進に、学会が果たした役割が、世界の他の国では見られないかたちで発揮されています。

たいいていのところで、学会活動の目標のうちには、当該分野の普及活動は大切な事項としてあげられています。植物地理・分類学会の会則でも、第2条に、関係分野の「進歩普及を図り、」と明記されています。当該分野の進歩に貢献することは当然ですが、普及に向けても責任をもつと宣言されているのです。確かに、当学会の活動も、関連分野の研究の面白さを広く普及するのに貢献してきましたが、ここへ来ていっばん的な理科離れ、諸学会の、とりわけ若手のメンバーの減少などが話題になります。当学会も、創立60年を迎えることになりましたが、あらためて初心に戻って、研究の推進と並行して、普及活動の活性化に思いをいたすべきときかもしれません。

科学のあらゆる分野で、「科学のための科学

science for science」の推進と並行して、「社会のための科学 science for society」への貢献が期待される時代になっています。植物学も、基礎分野で研究に貢献している研究者が、生物多様性保全など、社会的な課題に緊急に対応し、シンクタンクの機能を果たすことが期待されています。

さらに、環境問題については政策担当者や専門分野の研究者が対応するだけで解決するものではなく、すべての市民が正しく対応することが不可欠です。そのために、問題に関する普及に貢献するためには、学会や、植物園などの社会教育施設の役割が大きいと考えられます。そこで、今回は市民の植物との触れ合いについて、学会や植物園はどのように貢献できるのかを考えてみることにしました。

生涯学習

植物園は博物館相当施設ですが、博物館と異なりますと、社会教育のための施設であると認識されます。所蔵している資料を展示して入館者の学習に資するという施設です。ところで、「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」(生涯学習振興法と略称されます)ができたのは1990年です。ここでも、小見出しに生涯学習という言葉を使いましたが、実はこの言葉、辞書の定義などでは、生涯教育とは区別されています。

言葉は概念であるといわれます。まず概念を明確にするため、生涯学習という言葉は現在の日本ではどのように理解されているかを整理してみます。ここでは『広辞苑』第6版の表現をお借りし、生涯学習と生涯教育の定義を並記します。

生涯学習：自己啓発、生活の充実、職業的知識・技能の向上などのために生涯を通じて学習すること、およびそのための活動。1990年、生涯学習振興法制定。

生涯教育：(life-long education) 生涯を通じて教育の機会を保障すべきであるとする教育観に基づいて行われる成人教育。1920年代にイギリスなどで提起され、65年にユネスコが提唱し、各国で普及。

このように比較すると明確ですが、生涯教育という言葉は英語の life-long education の訳語で、成人教育を保障するための用語であるのに対して、生涯学習は生涯を通じて自分が学ぶ行動を指す一般用語といえます。英訳は life-long learning となります。もっとも、ふつうにはこの2つの四字熟語は意識して区別されることはあまりなく、同じような使われ方をしています。

このことは education という英語(相当の欧米語でも同じことです)とそれに対応する日本語の教育との関係でもいえます。日本語の教育は、同じ辞典

で

教育：①教養育てること。望ましい知識・技能・規範などの学習を促進する意図的な働きかけの諸活動。[以下省略]

とありますが、これはあくまで教育を与える側からの説明です。それに対して、education は引き出すことを意味し、教育を受ける側にたった説明がなされる用語です。西欧の概念では、家庭教師はギリシャ時代の奴隷の仕事だった事実を引きずっているのでしょうか。

明治維新以後の日本国では、西欧文明に追いつけ追いこせのかけ声の下、一途に富国強兵を求めましたから、教育についても、それを国民に与え、勉強させるかたちで推進されてきました。これによって、ある時期日本は世界第2の経済大国に成長しましたから、求めた方向では成功だったといえないわけではありません。教育は、教える主体(教師)が教えられる客体(児童、生徒)を主体の意図する方向へ導く行動と見なされますから、教えられる側は、勉強(強いて勉めるのですから、楽しいかそうでないかは問題ではありません)して知識の習得に励まなければなりません。学校における知育は成果をあげ、日本の成長路線を支えてきました。

問題はそれで日本国民が納得しているかどうかですが、日本人の大多数がしあわせを満喫しているとはいえない状況にあります。最近みなさんが考え直す機会があったように、ブータンでいうしあわせと、日本でいうそれとはずいぶん異なったものになっているという現実もあります。1990年に生涯学習振興法がつけられ、当時の文部省で生涯学習局が筆頭局になったのは1992年でした。当時から、そのことはあまり知られていませんでしたし、今もよく理解されているようには思えません。そして、教育といえば学校教育という考えが日本では広く浸透しています。

今回の当学会の60周年記念大会は、福井総合植物園が世話役となって開催されます。植物園など、博物館相当機関の生涯学習支援が、学会活動とどう協働できるか、いかにも今日的な課題に対応しています(岩槻 2004, 2010)。

日本人と自然、植物

人と自然の共生という言葉が広く使われます。しかし、この言葉、英語にならないものですし、英語で表現してみても外国人にはなかなか理解してもらえないものだということを考えてみたことがありますか。自然という言葉も、共生という言葉も、日本語で使う場合と英語の場合で大違いです。Nature は自然とはだいたいぶずれた言葉ですし、共生にいたっ

ては、相当する英語を探し出すことは不可能のようです。だいたい英語圏に、共生に相当する概念がないのですから、言葉がないのが当然かもしれません。

自然という日本語は、おのずから成る、であって、人為人工の加わらない様を指します。ですから、里山の自然を護ろう、とか田園地帯で自然を満喫しよう、などといういい方は日本語としては正しい使い方ではないはず。里山、人里は弥生時代以来の日本人が自然を開発して人工的に管理している場所です。むしろ、1960年代以降、中山間地帯まで化石燃料に依存する生活が普及してから、薪炭材の供給地でもあった里山林の周期的な伐採が途絶え、里山放棄林の荒廃が問題とされるようになっていく現実に注目する必要があります。生物多様性国家戦略でも、4つの危機の第2番目に、人為による管理を放棄したために生じた危機をあげています。里山のみどり豊かな環境を大切にしようというSATOYAMAイニシアティブも、自然保護という筋書きに載せようとするが無理があります。

さらに、みどり豊かな場所を自然と呼ぶならわしが広がってから、人為による管理によってみどり豊かに維持されている場所を正確に表現しようとして、二次的自然とか疑似自然と呼ぶことがあります。そのために、逆に、字義通りの自然を示すために、真正の自然とか、原始自然といういい方をすることさえあります。ありますというより、わたし自身もしばしばそういういい方を使っています。言葉としては、矛盾する2つの言葉の組み合わせで、何とも非論理的な構成のものです。

言葉の展開はともかくとして、古来日本人は自然を八百萬の神の住処と見てきました。あらゆるもの(=勿体)には神が宿ると信じ、ものを大切にしてきました。江戸時代後期、江戸は百万都市になっていましたが、同じ頃やっぱり百万都市だったパリやロンドンよりはるかに清潔な街だったと記録されます。考えてみれば、わたしたちがこどもの頃でも、ものを大切にすることは決してケチなだけでなく、ものそのものへの畏敬の念を込めたものだったように思います。江戸の町でも、人々は使ったものを再生し、使えなくなるまでさまざまな用途で活用していました。だから、廃棄物というような概念はありませんでした。ものはさまざまなかたちで大切に利用し、最後に残るわずかなゴミも、きっちりと収集して、埋め立てに使うという処理をしていたそうです。神様の授かり物を無駄にするなど、まさに勿体ないことだったのです。(勿体ないという言葉が、まだ使えるのに無駄にするのは勿体ない、という文脈で使われるのが主流になったのは最近のこと

です。) 明治以後の物質・エネルギー志向の生き方が、消費は美徳などというおぞましい表現をもたらし、経済効率だけを求めて地球資源に圧迫を加えて地球環境問題を人類の最大の課題にしてしまった現実には、わたしたちが伝統として受け継いできた自然とのつきあい方を放棄したことから加速させているのです。

一方、natureという英語(または同根の欧米語)はwildと同義で、そこはdemonの棲むところと理解され、万物の霊長である人の叡智を用いてクリアし、現存する資源を有効利用することは善なる行為であると評価します。西欧だけでなく、中国でも博物学は自然の産物を調査研究する領域で、当該地域の貴重な財産目録をつくるという意味で博物の記録が進められました。自然の産物を神そのものと見なし、感謝の念をもって使わせていただく日本人の伝統的なものの見方は世界でも特異だったのでしょうか。それは、生物多様性など自然の産物には恵まれているものの、頻発する自然災害に苦しめられ、神の恩恵と怒りの2面性に対応して生きてきた日本列島の住人が育ててきた特殊な文化だったのでしよう。

地形にもよりますが、日本列島はその約1/5が開発されて里地(農地や村落)となり、そこだけでは十分でない資源の供給地として、やっぱり国土の1/5ほどに相当する後背地を里山林として利用しました。耕して天に至るというような開発は行わず、国土の約半分は、奥山として野生の棲み場所にしました。このような日本列島の開発は、技術の進歩に合わせて国土の持続的な開発を行った欧米などの場合とひと味違っています。

共生という言葉についても触れる必要がありますが、紙幅に事欠きます。最近、共生についてまとめてみましたので、そちらを参照していただくように願います(岩槻・仁王 2012)。

人と自然の共生

日本人が自然と共生してきた実態は何だったか、なぜそのような歴史が刻まれたか、明治維新は日本人のところにどのような変革をもたらしたか、グローバルゼーションと呼ばれる言葉の盲点は何か、どうやら植物と語り合う者が責任をもって発言しなければならぬ局面が展開しているようです。西欧で植物学を学ぶ人たちが話しますと、たいいていのが植物と触れ合った幼児体験を語ります。自然の申し子だったような日本人が、植物と語り合う時を見過ごしていることに、わたしたちはもっと危機感を持つべきですし、そのことを植物と日常的に語り合っている者こそが社会に向けて警告、発信すべき

だと思われます。

植物とのつきあいを深めることによって、学ぶ喜びを生きる喜びに昇華させることができるのは人だけにできる特技であると認識したいですし、そのことが論理的にまとめられたら、発言できたらと思います。生物多様性の保全の必要性は、地球規模では、生物多様性の持続的利用、という表現で推進されます。しかし、これはあくまで物質・エネルギー志向の西欧的な発想に従って、万物の霊長が自然を上手に管理維持して持続性を保つようにしようという考えです。それが経済優先の開発で脆くも崩れた20世紀の人類の行動への反省に基づいているとはいえません。わたしたちは、日本列島の開発を人と自然の共生という視点で進めてき、だから少なくとも明治維新までは中大型の動物に1種も絶滅種をつくらなかった環境保全に成功していた事実をあらためて見直し、そこに見られた現実を地球規模で展開することが今こそ求められているように思います。

人と人の絆の尊さは、生き物のすべてが生を共有するものであるとの認識あってこそ実感につながるものです。自分という個体の生と同じように、すべての生き物が一体となった生命系の生(岩槻, 1999)を愛おしむことこそが、自分と自分の周囲の生を共有することであり、植物の生を直視するものにこそその真実が正しく見えてくるものかと思えます。

豊かな日本列島の植物多様性の調査研究に成果をあげてきた日本の植物学の成果は、一握りの専従研究者の成功ではなくて、専門的な成果に常に関心をもち続けた市民と、情報を提供し、問題意識を共有

してきた専従研究者との協働あってこそのものであったことをあらためて確認し、60年の成果に基づく当学会の活動がますます発展することを期待するものです。

要約

日本列島の住人が、自然、とりわけ植物と親しみながら生きてきた歴史的事実に基づき、日本列島の開発が人と自然の共生が演出されるかたちの展開だったと理解し、この開発の方式はこれからの地球の持続的な利用の基礎理念とされるべきものであると考えます。植物に対する市民の科学的好奇心は、最近まで専従研究者との理想的な情報交流によって発展、維持されてきました。学会の社会貢献として、広義の普及活動の最高の成果と認識し、さらなる発展を期待します。

引用文献

- 岩槻邦男. 1999. 生命系—生物多様性の新しい考え. 岩波書店, 東京.
- 岩槻邦男. 2004. 日本の植物園. 東京大学出版会, 東京.
- 岩槻邦男. 2010. 植物園学を育てる. 日本植物園協会誌 44: 7-14.
- 岩槻邦男・仁王以智夫. 2012. 共生する生き物たち—微生物の世界から日本の共生観まで. ミネルヴァ書房, 京都.
- 新村出(編). 2008. 広辞苑 第6版. 岩波書店, 東京.